



TITLE:

アフリカ農村社会における高齢者の生活実践と社会関係ーエチオピア南西部アリの事例ー(  
Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

野口, 真理子

---

CITATION:

野口, 真理子. アフリカ農村社会における高齢者の生活実践と社会関係ーエチオピア南西部アリの事例ー. 京都大学, 2016, 博士(地域研究)

ISSUE DATE:

2016-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19841>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により要約は2017-03-23に公開

京都大学	博士（地域研究）	氏名	野口 真理子
論文題目	アフリカ農村社会における高齢者の生活実践と社会関係 —エチオピア南西部アリの事例—		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、エチオピア南西部の農村に暮らす高齢者の営む生活実践を記述し、そのなかで彼らがとりむすぶ多様な社会関係のあり方の特徴を明らかにした。この地域では、高齢者は、社会福祉サービスや年金などの公的制度の恩恵を未だ受けにくい状態にあり、その生存は農業を中心とした自給度の高い生業活動に大きく依存している。このような状況のもとで、人びとが互いの生存に配慮しあっておこなう行為に焦点をあてた。</p> <p>第1章では、アフリカにおける高齢化に関する論点を先行研究に基づいて整理し、本論文の視座について述べた。人生の後半を過ごしている人びとを示す社会的カテゴリーとして、日本語では高齢者あるいは老人に相当するような概念が、それぞれの社会・文化において構成されたものであることを明示したうえで、高齢者の生活に関する長期的・実証的研究の積み重ねの必要性を指摘した。</p> <p>第2章では、本論文の調査地であるエチオピア南部諸民族州、南オモ県、南アリ郡 M 村の概要を示し、そこに居住するアリの人びとについて民族誌的な記述をおこなった。</p> <p>第3章では、アリ社会における「高齢者」の概念と、「ケア」の意味内容について検討した。アリ語で年長者をしめす「ガルタ <i>galta</i>」という語彙の多義性に着目し、その意味の広がりを整理した。「ケア」を定義した上で、アリの人びとにとって具体的にどのような行動が該当するのか、親子関係に関わる社会規範や、他者との関係性のもとに成立する行為をあらわすアリ語の語彙をまとめた。特に、老親のケアは子どもが担うべきであるという規範と、父と子は同居してはいけないという一見して相反するような規範の両方が重視されていることを指摘した。</p> <p>第4章では、アリの高齢者の日常生活について、活動量計をもちいた歩数と運動量の計測と、基本的日常生活活動(Basic Activities of Daily Living: BADL)の評価をおこなった結果を分析した。BADLに加えて、地域固有の生業活動や家事など、人びとの生活に必須とみなすことができる活動の評価もおこなった。歩数や運動量に関しては、高齢者それぞれの生活スタイルに応じて差が大きく開き、若い世代に匹敵する活動量を維持している者もあった。その一方で、生業活動が限定的になり、活動量が低下している高齢者であっても、BADL の評価結果は全自立の者がいた。したがって、これらの指標をもとにしてアリの高齢者を特徴づけることはできなかった。しかし、新たに生業に関連する活動を評価した結果からは、齢を重ねるにつれて、アリの人びとが従事し続ける活動と、撤退する活動に一定の傾向を見いだすことができた。この評価が、アリにおいて高齢者であることのひとつの基準となりうることを示した。</p> <p>第5章では、アリの男性高齢者 1 名の計 74 日間に渡る日常生活を直接観察した資料をもとに、他者とのあいだで結ばれる相互行為の種類と頻度を記録して分析をおこなった。その結果、近親者の関与と、農作業などの生業や家事に関連した活動への関与がも</p>			

っとも多く観察されたことを示した。アリ社会において、高齢者が日常的な社会関係を最大限に活用し、生業活動に関与し続けていることが確認するとともに、彼らが単に受け身の状態でケアされるままの存在ではなく、むしろ自ら他者をケアする存在でさえあるという状況が社会的につくり出されていることを明らかにした。

第6章では、アリの高齢者の居住状況に着目した。慣習的に父子同居が禁じられながらも、子どもを中心とする親族に対して老親の面倒をみることが強く期待されている社会において、高齢者が日常生活を営むうえでどのような居住に関する選択をおこなっているのかを事例にもとづいて検討した。その結果、高齢者がサポートを必要とするようになった際には、近隣の親族や姻族を含む拡大家族的な社会関係に基づく既存の仕組みが作動しない場合でも高齢者の生活が支えられ、たとえそれが規範から一部分が逸脱していても受け入れられるような柔軟な社会であることを示した。

本論文は、身体的老化の程度、生活状況、人となりの様々に異なる高齢者が、それぞれ異なる境遇の中で、必ずしも長期的に安定的とはいえない関係性を常に再編し続け、社会的に疎外されることもなく、結果的に堂々と誇りをもって日々を過ごすことができているその様相を提示した。高齢者をめぐってその時々互いに必要な行為を提供し合うことが可能となっている背景には、実際に対面して「顔を見る」という行為を慣習的営為として大事にするなかで培われた応答的な関係性の存在が挙げられた。この地には、規範的に「ケアされるべき」存在として規定された「高齢者」像は存在せず、高齢者を含む人びとが、社会規範に従いながらも互いの状況を確認し、必要なものをみとめ、補い合う行為を実践し、支えあっていることが明らかになった。

(論文審査の結果の要旨)

人口が急激に増加してきたアフリカにおいても、そう遠くない将来に高齢化社会の到来が予想され、高齢化とそれに起因する諸問題に対する関心が高まっている。近年アフリカの都市部だけでなく、農村部において生じている家族・社会関係の変化が、一部の高齢者を徐々に社会的周縁に追いやり、コミュニティ内に不協和音が生じるようになってきたとされる。これまでアフリカ社会を扱う研究のなかで、しばしば高齢者は、社会・文化の理解にとって情報の宝庫ととらえられ、伝統的な地位や役割をもつ権威者とされてきたが、彼らの実際の日常生活実践について実証的に記述・分析する研究はほとんど注目されてこなかった。むしろ、高齢者が問題化される局面では、最近までの我が国における福祉政策のアプローチと同じように、高齢者を一様にケアされるべき存在とみなし、そのケアを誰が担うべきかを問うという規範論的議論に終始している。

本論文は、これまで等閑視されてきた高齢者の個人的多様性に留意しながら、エチオピア南西部のアリの人びとが居住する農村地域において、高齢者の日常的生活実践が、家族世帯、近隣、地域コミュニティとの関わりのなかでどのように営まれてきたのかを、長期にわたる参与観察を通して得た実証的な観察資料に基づいて多面的に検討した優れた研究成果である。

本論文は、以下の三つの学術的な貢献によって高く評価することができる。

第一は、アフリカにおいて近年始められたばかりの高齢者研究の分野における貢献である。サハラ以南アフリカにおける社会・環境の多様性を考えれば、様々な状況に生きるアフリカの高齢者をひとまとめにして扱うことは難しい。しかし、公衆衛生学や老年学の分野で注目されはじめたアフリカの高齢者研究では、国家や比較的大きな地域を単位とした統計的手法による分析が主となっている。本研究は、地域研究の手法を基礎に、これまで研究蓄積のあったエチオピア南西部の農耕社会において、75 世帯 292 人が暮らすコミュニティを対象とした民族誌的調査を実施したうえで、活動量の計測や基本的日常生活活動(Basic Activities of Daily Living: BADL)の評価など、他地域との比較に耐える資料を得た。これまで高齢者の生活実態に関する記述がほとんどなされていなかったエチオピアの農村部において研究をおこなった本論文の功績は大きい。

本論文の第二の貢献は、先の実証的な調査研究から明らかにされた、高い活動性を示す元気な高齢者の存在が、いかなる社会環境のもとで可能となっているかを、日常的に実践される社会的相互行為に注目して明らかにしたことにある。人びとが実践する相互行為の具体例を長期間にわたって子細に記録し分析をおこなった結果、相手としては近親者の関与が最も多く、行為の種別は農作業などの生業や家事に関連した活動への関与がきわだって多く観察されたことを示した。アリの高齢者が、単に受け身の状態でケアされるままでの存在ではなく、むしろ自ら他者をケアする存在でさえあるという指摘は、日常的な社会関係を最大限に活用し、生業活動に関与し続けるアフリカ農村の高齢者像を確認するとともに、そのような状況が社会的につくり出されていることを明らかにした点で重要な貢献をなしている。

本論文の第三の貢献は、アフリカ農村における高齢者のケアに関して当然視されてきた拡大家族的紐帯の役目に関して、相反する事例を提示したことにある。子どもをはじめとする親族によるケアが慣習的規範とされている社会においても、人びとの居住形態や状況依存的な相互行為を精査すると、無縁と思われる人びとからの支援によって生活を成り立たせている高齢者が存在することが示された。アフリカにおける高齢化の進行にともなう社会環境の変化を予想し、その対応策を用意する上で、ケアのあり方を再考するのに重要な示唆を含む研究成果であると評価できる。

以上のように本論文は、アフリカ農村社会における高齢者の日常を詳細に観察分析することによって、人びとの生活実践と社会関係の実相を解明した非常に優れた業績である。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 28 年 1 月 26 日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第 14 条第 2 項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。